

〔提 言〕

家族看護における国際化・グローバル化を考える

文京学院大学保健医療技術学部看護学科

中村由美子

今年度は、昨年8月に第12回国際看護学会がデンマークのオーデンセで開かれ、日本からは120余名と多くの会員の皆様が参加し、交流を深めることができました。オーデンセの地名は北欧神話で有名なオーディンにちなんで命名され、童話作家で有名なH.C.アンデルセンの生誕の地でもあります。千葉県船橋市とも姉妹都市であり、私たち日本人にとっても身近に感じられる都市でした。今回の学会参加を通して、デンマークの文化に親しみ、学会参加者と触れ合う中、家族看護の国際化や家族看護の発展のためには、実践者や研究者間のコミュニケーションが欠かせないことを痛感しました。

21世紀にはいり、わが国でも、国際化、グローバル化の時代と言われるようになってきました。そのことが私たち看護分野にどのような影響を与え、そして、私たち看護師は具体的に何をしたらよいのか考えてみたいと思います。皆様ご存知のように、グローバル化と国際化とは異なり、国際化(Internationalization)は国の枠組みを前提として、他の国々との交流を深めて仲良くすることであり、グローバル化(Globalization)は国の枠組みを越えて地球規模に広がることであると述べられています(宮脇淳, PHP政策研究レポート, Vol. 4, No. 53, 2001)。歴史的にみてもわが国日本は、イギリス、アメリカなど多くの国々の文化を受け入れ、さらに形を変えて独自のものを作り上げて発展してきた経緯があります。看護においても同様であり、これから他の国々との交流を深めていくとともに、それら

の国々で構築された理論などをわが国独自のものへと発展させていく時期がきたと言えるのではないのでしょうか。家族看護分野においても、その役割はますます増大してきており、グローバルなレベルでの看護実践や看護教育が求められ、必要となってきたと思います。

そのような社会情勢の中で、本学会誌である家族看護学研究とJournal of Family Nursing (JFN)とのabstractの交換はうれしい出来事とも言えます。私たちが実践している日本の家族看護の理解を得るためにも、International Family Nursing Association (IFNA)をはじめとした諸外国の看護師との交流、そして何にもまして日本国内での交流が重要であると考えています。250を超える大学における家族看護教育を、本学会が中心に発信していく時期が来ており、そのためにも研究をはじめとしたエビデンスの蓄積が重要です。1990年代に開花したわが国の家族看護を、四半世紀たった今、さらに花咲かせていく必要性を感じています。家族看護実践としての事例1つにも、その背景となる文化を感じ、考え、それらを言葉として残していくことが必要です。日本と言っても地域による文化の差は大きく、また、アジア地域で日本が果たす役割も考えていくことが重要だと考えています。言葉の壁はありますが、それらを少しずつでも乗り越えていきましょう。

是非、会員の皆様には家族看護研究会誌に投稿していただき、エビデンスを作り上げていきたいと思っております。